

# 長崎県感染症発生動向調査速報(週報)

平成30年第35週 平成30年8月27日(月)～平成30年9月2日(日)

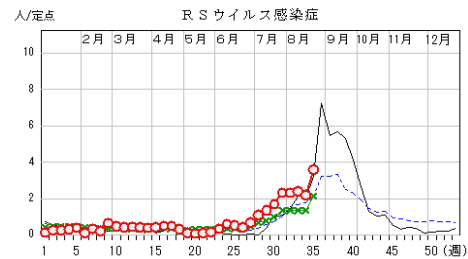
## ☆定点報告疾患(定点当たり報告数の上位3疾患)の発生状況

### (1) RSウイルス感染症

第35週の報告数は158人で、前週より61人多く、定点当たりの報告数は3.59であった。

年齢別では、1歳(69人)、1歳未満(68人)の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、県南保健所(10.40)、県央保健所(6.67)であった。

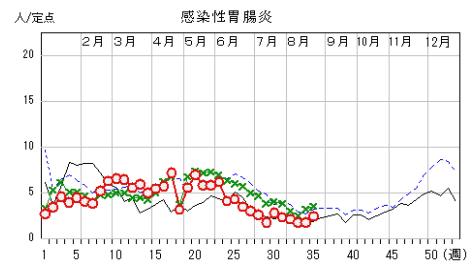


### (2) 感染性胃腸炎

第35週の報告数は107人で、前週より28人多く、定点当たりの報告数は2.43であった。

年齢別では、2歳(18人)、1歳(16人)、1歳未満(12人)の順に多かった。

定点当たり報告数の多い保健所は、対馬保健所(6.00)、佐世保市保健所(4.17)であった。

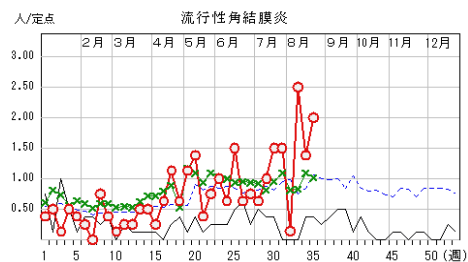


### (3) 流行性角結膜炎

第35週の報告数は16人で、前週より5人多く、定点当たりの報告数は2.00であった。

年齢別では、20～29歳(3人)、2歳(2人)、4歳(2人)の順に多かった。

報告のあった保健所は、佐世保市保健所(6.00)、長崎市保健所(2.33)、西彼保健所(2.00)、五島保健所(1.00)であった。



○ 当年(長崎県)      ー 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## ☆上位3疾患の概要

### 【RSウイルス感染症】

第35週の報告数は、前週より61人増加して158人となり、定点当たりの報告数は3.59でした。地区別にみると、上五島地区以外から報告があがっており、県南地区(10.40)、県央地区(6.67)の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

RSウイルス感染症は、発熱や鼻水が主な症状の呼吸器感染症で、通常は軽症で済みますが、一部は重い咳が出て呼吸困難や肺炎になることもあります。ワクチンはなく、接触感染や飛沫感染で一度かかっても再感染し、大人も感染することがあります。乳幼児、特に6ヶ月未満の乳幼児が本ウイルスに罹患すると、呼吸困難を伴う重篤な細気管支炎や肺炎、脳症を発症することがありますので、心臓などに基礎疾患のある小児では特に注意が必要です。小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

**【感染性胃腸炎】**

第35週の報告数は、前週より28人増加して107人となり、定点当たりの報告数は2.43でした。地区別にみると、壱岐地区以外から報告があがっており、対馬地区（6.00）、佐世保地区（4.17）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早めに医療機関を受診させましょう。

**【流行性角結膜炎】**

第35週の報告数は、前週より5人増加して16人となり、定点当たりの報告数は2.00でした。地区別にみると、佐世保地区（6.00）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、主にD群のアデノウイルスによる疾患です。涙液や眼脂で汚染された指やタオル類からの接触感染により伝播し、小児からお年寄りの方まで幅広く罹患します。潜伏期は8日から14日で、急に発症し、眼瞼の浮腫、流涙、耳前リンパ節の腫脹を伴います。角膜に炎症が及ぶと透明度が低下することがあります。さらに、新生児や乳幼児では偽膜性結膜炎を発症し、細菌の混合感染で角膜穿孔を起こすので注意が必要です。有効な治療薬はなく、対症療法が基本となります。感染力が強いため、眼分泌物はティッシュペーパーなどで除去し、直接手で触れないように気をつけましょう。また、手洗いを励行し、洗面器やタオルを共有せず、触れた場所をアルコール等でよく拭くなどして感染防止に努めましょう。

**☆トピックス：風しんに注意しましょう！**

風しんは、せきやくしゃみなどの飛沫から感染し、通常は発疹や発熱が起きますが軽微な症状で経過し重篤化することはほとんどありません。しかしながら妊娠初期に感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など（先天性風しん症候群：CRS）を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風しんやCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦または妊娠する可能性の高い方に伝播させることのないよう、周囲の身近な人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチン接種を実施することが重要です。

本県での今年度の報告はありませんが、関東地方で風しんの報告数が例年と比べて大幅に増加しております。30代から50代の男性においては、風しんの抗体価が低い方が2割程度存在していることが分かっています。風しんワクチンの接種対象が1994年まで中学生の女子に限られたため、この年齢層には免疫がない男性が多数存在していることが今回の流行に大きく影響しているようです。今後の風しんの動向に十分注意しましょう。

（参考）厚生労働省 風しんについて（外部のページに移動します。）

[https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/rubella/](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/rubella/)

## ☆トピックス：腸管出血性大腸菌感染症に注意しましょう！

腸管出血性大腸菌感染症は、O157やO26をはじめとした「腸管出血性大腸菌」による感染症です。主な感染経路は、菌に汚染された食品や患者の便で汚染されたものに触れた手を介した経口感染です。2～9日の潜伏期間の後、腹痛・下痢・血便などの症状を呈します。無症状の場合もありますが、発症者の約5%が、溶血性尿毒症症候群（HUS）や脳症（けいれんや意識障害）などの合併症を起こし、時には死亡することもあります。特に、抵抗力の弱い高齢者や小児などでは、注意が必要です。8月15日に県医療政策課より注意喚起を目的とした発表がありました。（詳細については下記リンクのホームページをご参照ください。）

長崎県では例年7月から8月に報告数が増加しますが、9月に入っても油断は禁物です。今後も動向に注視し、次の点に気をつけて感染予防に努めましょう。新学期が始まり、集団での生活が増えますので、特に手洗いの励行を心がけましょう。また、症状があるときは速やかに医療機関を受診しましょう。

- 食肉を調理する際は十分に加熱しましょう
- 生肉を調理する際、器具は専用のものにするか、使用后すぐに十分な洗浄・消毒をしてから他の調理に使用しましょう
- トイレやオムツ交換の後、調理・食事の前に石鹸と流水で十分に手を洗いましょう
- 下痢症状のあるときはプールの使用や入浴は控え、シャワー浴または最後に入浴しましょう

（参考）長崎県 医療政策課 三類感染症(腸管出血性大腸菌感染症)が発生しました  
<https://www.pref.nagasaki.jp/press-contents/351849/>

（参考）長崎県 医療政策課 腸管出血性大腸菌  
<https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-hoken/kansensho/kansenshou/ehec/>

